

## 別記様式第 6

## 論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博士（文学）	氏名	片見 彰夫
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
論文題目 Studies in the Language of the Fourteenth-Century English Mystics (14 世紀イギリス神秘主義者の言語研究)			
論文審査担当者			
主査	教授	地村	彰之
審査委員	教授	吉中	孝志
審査委員	教授	新田	玲子
審査委員	教授	今林	修
審査委員	教育学研究科 教授	中尾	佳行
審査委員	青山学院大学 名誉教授	秋元	実治
〔論文審査の要旨〕			
<p>本論文は、英語復興期の 14 世紀に活動したキリスト教神秘主義者の散文における言語について考察したものである。本論文では、言語と文体について、文法、語用論、そして修辞法の特徴を中心に考察することによって、英語散文史上重要である神秘主義散文の言語における新たな知見を得ることを主眼とする。</p> <p>本論文は、序論、本論全 5 章、結論によって構成されている。</p> <p>序論では、神秘主義者の言語に関する先行研究を紹介し、本論文に関連するところを要約している。ノルマン人による征服以前の国民文学を受け継ぐ散文を書いた Richard Rolle を挙げ、英語散文の伝統性に着目しながら、イギリス文学史における神秘主義散文の意義を指摘する。Richard Rolle から影響を受けた Walter Hilton, Julian of Norwich, Margery Kempe も、神秘主義散文として取り上げる。</p> <p>第一章では、主な対象として論じる 4 人の神秘主義者の思想と、作品の背景について説明する。彼らはいずれもイングランド北東部を主な活動地としており、テキストは東中部方言で書かれている。Rolle や Hilton は、当時から広く読まれ、名の知られた神秘主義者であった。Julian の文中には Hilton の影響を想起させる部分が見受けられる。Hilton や Rolle の作品を凌ぐほど、Kempe は神による高貴な働きを感じた。Julian の庵を自ら訪ねたことや Hilton らの著した観想文学や神秘主義文学と接触したことが Kempe の霊的成長を促したと論じる。</p> <p>第二章では、Julian と Kempe において説得という観点から文法項目を選び、両者を比較している。その際、他の中英語作品や現代英語にも言及しながら、英語史的考察も行っている。現在分詞と動名詞の生起状況と受動態構文について、文脈を考慮しながら調査している。受動態の用法にも着目し、分析的で客観的態度を保ち受動態を好む Julian に対して、自己の意思を主観的に打ち出したい Kempe は能動態での描写が多いと述べる。</p> <p>第三章では、後期中英語の宗教散文を中心として、近代英語から欽定訳聖書中の 4 編の福音書や Shakespeare 喜劇の言語も通時的に考察している。神秘主義者は自己の得た幻視や体験を伝えることにより、相手の心象に変化を生じさせることで、行動の変容を導こうとすることが多い。神秘主義者達は、発話行為動詞を呼びかけや強意表現と輻輳させることで効果を高めていることを検証している。また神秘主義者を中心とした中英語期は権威ある書や言説からの引用を多めに用いる傾向があるが、近代英語では書き手自身の意思が明示される例が多くなっていることを数量化することにより示す。彼らによる口語的な文体を反映しているコミュニケーション形式は丁寧さの理論からも研究の発展性があることを論証している。</p>			

第四章では、本散文群の文体的特徴を考える。二つの語を **and** で繋げたワードペア、反復と変奏、メタファーについて検討し、このような修辞が宗教散文の特徴的な文体の基底にあることを指摘する。テキストの文脈を深く考察することによって、説得に關係する表現の意味を把握しようとしている。

第五章では、**Julian** のショート・テキストと 20 年間の再考後、ほぼ 6 倍の長さとなったロング・テキスト間の綴りのヴァリエーションや表現形式を比較する。ロング・テキスト第 51 章では、ショート・テキストにはなかった反復・変奏表現を加える等の大幅な加筆を行っている。このような 2 つの版において、拡大や省略されている表現形式の違いを比較し、その意味を考察している。

最後に、神秘主義散文の作者たちは、文法、語用論、修辞法を駆使して、説得を行うための表現を構築するとともに、英語復興の息吹を色濃く反映させたと述べる。本論文は、神秘主義散文群に対してキリスト教散文としての価値づけをただけでなく、英語英文学史上での重要な位置づけをもしており、今後の神秘主義文学研究に大きく寄与するものであると高く評価できる。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（文学）の学位を受ける十分な資格があるものと認める。